

生対協の文化事業 ビデオシリーズ

港北
ニュータウン

ふるさと伝承 記録集

滝不動のある町

祭り囃子がきこえる

回り地蔵と花籠の舞

伝説と炭焼きの里

虫送り

水ぬるむ春の祭り

「鯛釣り踊り」と大塚・歳勝土遺跡

望郷—失われたものの記録

梅匂う里の菊づくり



財団法人 港北ニュータウン生活対策協会

はじめに

港北ニュータウンは横浜の副都心として、恵まれた自然環境と優れた立地条件を最大限に生かしながら、多くの機能をもった都市形成をめざしているところであります。

こうした開発とあいまって、港北ニュータウン並びにその周辺の地域社会は、昔の面影はなくなり、驚くほどの変貌を遂げてまいりました。

この地で営々と先祖伝来の土地を守り、生計を営まれてこられた方々の各種の祭事をはじめ、民俗芸能等多くの伝統行事もやがて大きく変化してしまうことでしょう。

こうしたことから先人の歩んできた足跡を振り返り、地域社会の歴史と伝統を確かな記録として残し、後世に伝えていくことは極めて重要であり、意義のあることと存じます。

このたび(財)港北ニュータウン生活対策協会では、「滝不動」をはじめ「祭り囃子」「望郷」等、9巻のビデオを制作いたしました。多くの方々がこのビデオをご覧いただくことによりまして、古い歴史と高い文化によって支えられてきた郷土への理解が深められ、地域の連帯とコミュニティが図られれば誠に幸せでございます。

このビデオが地域活動あるいは教育活動等、広範な場でご利用いただきますようお願いしております。

平成十一年三月

財団法人

港北ニュータウン生活対策協会

常務理事 小松原正夫

目 次

① 滝不動のある町	4
② 回り地蔵と花籠の舞	6
③ 祭り囃子がきこえる	8
④ 水ぬるむ春の祭り	10
⑤ 虫送り	12
⑥ 「鯛釣り踊り」と大塚・歳勝土遺跡	14
⑦ 梅匂う里の菊づくり	16
⑧ 伝説と炭焼きの里	18
⑨ 望郷	20
● スライドー望郷	22

ふるさと
伝承ビデオ

1

滝不動のある町

—— 老馬鍛冶山不動尊の今むかし

撮影期間

平成三年八月～平成四年三月

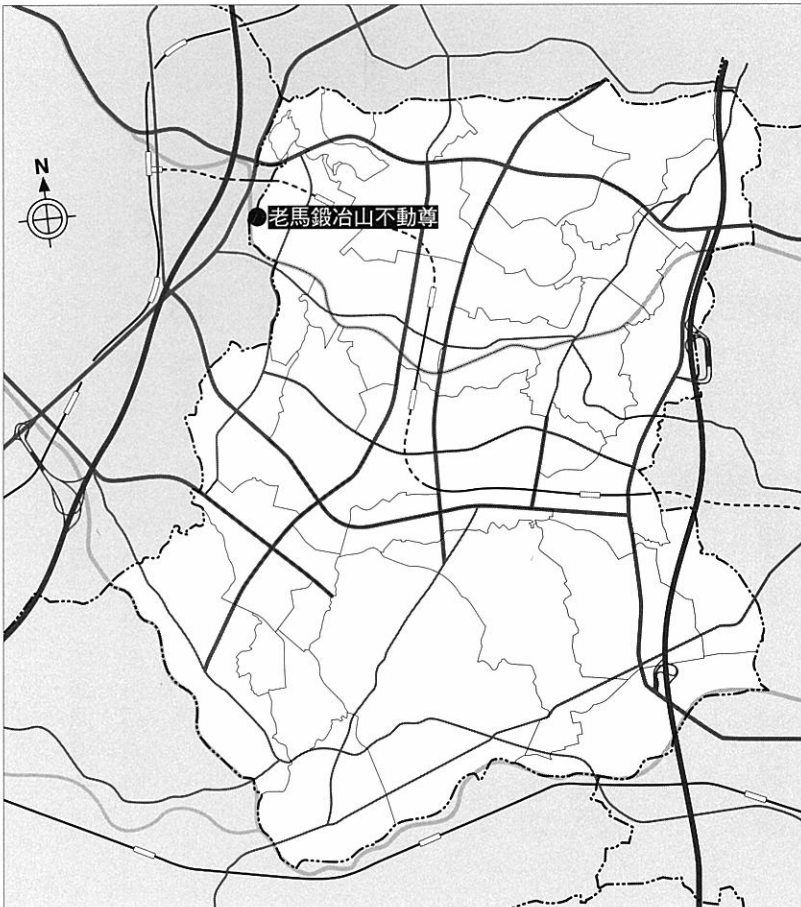
撮影場所

港北区中川町(現・都筑区中川三丁目)、
老馬鍛冶山不動尊の一带

見どころ

平成三年前後の中川町、改築前の老馬鍛冶山不動尊とその周辺、現在造成が進んでいる横浜市と川崎市の市境である旧大山街道をタイムスリップしたように見ることができる。

また、「老馬」「鍛冶山」の地名の由来や、不動像を運んできた僧の話、念仏講など、昔の面影をしのぶことができる。



ストーリー

場面は現在の国道246号線から始まる。旧称大山街道の由来である大山阿夫利神社は降雨の霊験^{れいけん}があるとされ、江戸時代以来多くの農民が参詣^{さんけい}した。ニュータウンの中央部を流れる早瀬川にかかる鍛冶橋周辺は、今も旧道の面影を残している。その道沿いにある老馬鍛冶山不動尊^{どうもり}の堂守をして大久保太市さんは、不動尊の由来を語る。

江戸時代末期、諦念法師が大棚村を訪れ、大久保家に一夜の宿を求めたところ、その婿養子となって住み着いたこと。背負ってきた不動明王を牛久保の長徳寺に預けたが行方不明になり、再び新潟まで不動明王を求めに行き、家の近くに堂宇^{どうう}を建てたこと。堂宇の下には、諦念法師作とされる石の不動尊と滝がある。この石の不動尊にはさまざまな霊験があるとされ、各地からいろいろな願い事をもって訪れる人が絶えなかったという。中川町では日照りがつづくと、石の不動尊に滝の水をかけて祈った。すると必ず雨が降ったという。

さらに、地名について、「鍛冶山」は、大久保太市さんの先祖が、刀鍛冶から野鍛冶となり、この近辺で鍛冶屋をやっていたことからきているようだ、と話す。「老馬」は牢屋があったから「ろうば(牢場)」になったという説もあるが、昔、この一帯は広大な放牧場だったといわれ、馬に関係する地名ではないかという。

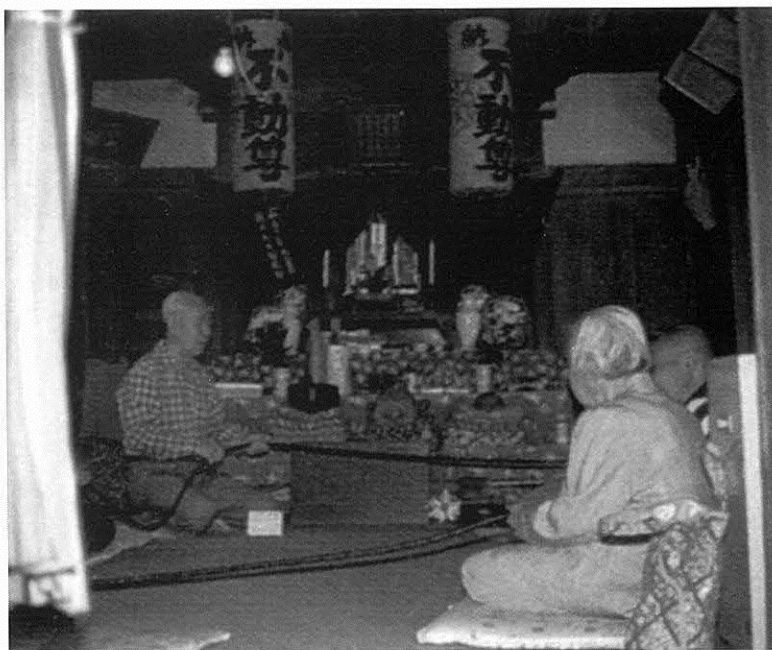
場面は昔の大山街道をほうふつとさせる旧道に移る。横浜市と川崎市の市境で、現在造成中のために今ではもうこの風景は見られない。鬱蒼とした竹林、雑木林、流れる湧き水。「血流れ坂」といわれた坂の話は、江戸時代の刑場を思わせるが、今はまったく跡形もない。竹林の中に馬頭観音の石塔が三基、ひっそりとある。

再び老馬鍛冶山不動尊。毎月二十八日に行われる念仏講が映される。古い木箱には文久二年の年号、鉦^{かね}には宝暦五年の銘がある。

る。その鉦を叩き、大きな数珠を回しながら集まった地域の人々が念仏を唱える。

棟札には嘉永元年の年号が記され、境内には安政三年建立の石版供養塔もあり、この不動尊が江戸時代から人々の拠り所であったことがうかがえる。

現在、この老馬鍛冶山不動尊は改築され、庫裡も新築、境内も整備された。周辺も宅地化されて景色は一変しているが、今も桜、けやきの大木が繁り、昔の面影をわずかに残している。



念仏講の一場面

ふるさと
伝承ビデオ

2

回り地蔵と花籠の舞

池辺町に伝わる風習と伝承芸能

撮影期間

平成三年八月～平成四年三月

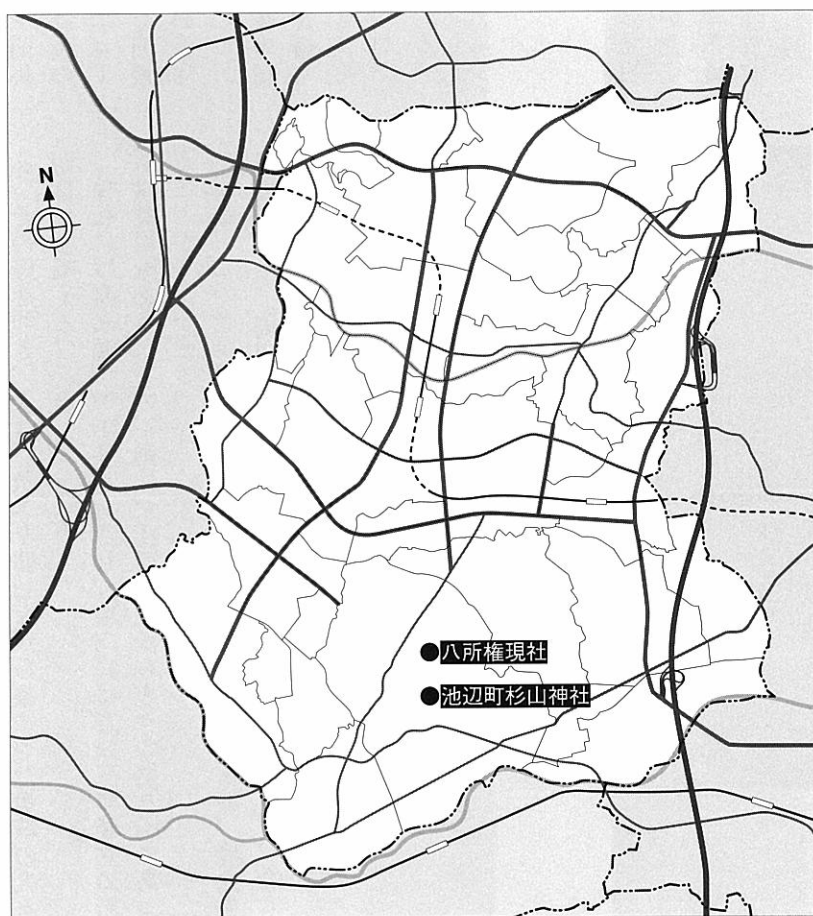
撮影場所

緑区(現・都筑区)池辺町

見どころ

平成三年から四年にかけての池辺町のた
たずまいとニュータウン建設の一環であ
る幹線道路、横浜上麻生線の工事状況がわかる。また、
杉山神社の例祭で行われてきた花籠踊り^{はなかご}は、その後中止
になり、この撮影が最後の記録になった。

各谷戸の念仏講や、今では珍しい風習になった「回り地
蔵」の話など、昔から続けられてきた伝統行事が人々の暮
らしにとけ込んでいる様子がわかる。



ストーリー

太い竹の先から枝垂れ桜のように赤や紫の花が垂れ下がる花籠^{はなご}。かけ声とともに若者が花籠を回す華やかな祭りの一コマ。ここは緑区(現都筑区)池辺町。中央を中原街道が通り、沿道には六地藏や馬頭観音、いぼとり地藏が点々と安置され、古い歴史の面影が残っている。

港北ニュータウンの開発で、町のほとんどは農業専用地区と市街化調整区域になったが、幹線道路、横浜上麻生線のバイパス工事が進行中である。佐野重雄さんは地権者の一人としてニュータウン建設に尽力されたが、工事中の町を案内し、開発への思いを語る。道路ができることで、地域が分かれ、人々の交流もとぎれるのではないかと。

八所坂^{はつしや}のそばに「セイの神様」という道祖神がまつられている。その前に丸い石があり、「セイの神の石」といわれ、毎年一月十四日のどんど焼きで焼かれる。どんど焼きは各谷戸ごとに地域の行事として行われている。

毎月十二日には座間さんの家でお題目講中が行われ、地域の人々が集まり熱心に念仏を唱える。

一日と十五日の早朝には八所権現社^{はつしやごんげんしゃ}で世話人が太鼓をたたき、町の人々がお参りに訪れる。八所権現社の隣には八所谷戸クラブがあり、毎月一日に地域の女性たちが集まり、歌を歌ったり、おしゃべりをしたり、昼食を食べる楽しい集まりをもうけている。

農業専用地区の中ほどに、江戸時代から続いていた富士信仰の名残り星谷富士^{はしやふじ}がある。小さな人工の富士山で頂上からの眺めがすばらしい。

このように歴史が色濃く残っている池辺町の各谷戸では、それぞれの伝統行事が行われているが、子育て地藏を十日おきに回して供養する「回り地藏」は、もうここにしか残っていないようだ。お地藏さんが回ってくると、道具をだし、花を供え、線香をた

て、子供たちの健やかな成長を願って丁寧に供養する。三日、十三日、二十三日の三の日に回されるお地藏さんはやさしいお顔で、子を思う親の気持ちが伝わってあたたかい。

九月二十日の池辺町杉山神社の例祭の日がやってきた。花籠づくり、踊りの練習と準備を重ね、いよいよ本番。鈴木豊町内会長は、昔は花籠踊りや御輿^{みこし}が村中を練り歩いた。特に御輿は激しい動きで有名だったと話す。今でも境内を練り歩く御輿は勇壮だ。そしてひとときわ目をひいた花籠の舞に拍手が起こった。



杉山神社の例祭で行われた花籠の舞

ふるさと
伝承ビデオ

3

祭り囃子がきこえる

—— 新しい街港北ニュータウンと茅ヶ崎町のたたずまい

撮影期間

平成四年六月～八月

撮影場所

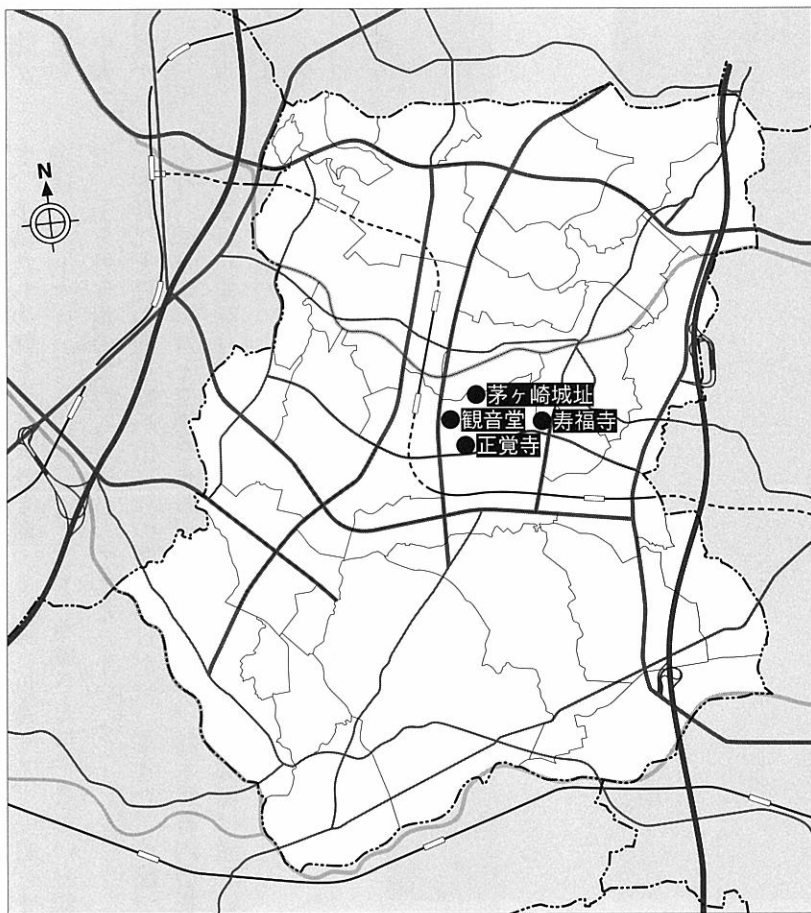
港北区(現・都筑区)茅ヶ崎町、正覚寺、
観音堂、茅ヶ崎城、寿福寺

見どころ

平成四年前後の茅ヶ崎町。

特に港北ニュータウンの中心部である市
営地下鉄センター南駅や幹線道路の新横浜・元石川線に
沿った造成の様子を映しながら、新しい街づくりへの金
子保さんの思いが語られる。

また、都市と農業の調和した街づくりの一つである朝
市が紹介される一方、古い歴史を残す茅ヶ崎城が紹介さ
れている。



ストーリー

祭り囃子の音が聞こえてくる。茅ヶ崎町にある観音堂。八月十八日は観音様の命日にあたり、前日の夜は法要の念仏が唱えられ、獅子舞が奉納されるのである。参加者の中に、(助)港北ニュータウン生活対策協会の副理事長、金子保さんの姿も見られる。金子さんは、ニュータウン開発を指導してきた一人。新しい街づくりに人一倍情熱をかけてきた。

金子さんはニュータウン建設への思いを語る。三十万都市を目指した二千五百三十ヘクタールの開発。開発前の少年時代は、郵便局もなく、雨の日も雪の日も来てくれる郵便屋さんが何よりのたよりだったこと。この一帯は神奈川県典型的な農村地帯で、田圃の基盤整備、農道の整備、河川の改修にあたり、農業を守るために努力してきたが、昭和三十二年頃からはじまった高度経済成長による大都市開発は乱開発を招きつつあった。このままでは自然も農業も壊されてしまうと苦悩していたが、狭い道路を幼稚園児もダンブも通っている状態に、計画的な開発をすること、道路整備や河川の改修をしようと、ニュータウン建設に踏み切った経緯を話す。

昭和五十八年、はじめて集合住宅ができ、六十一年からは研究施設も誘致されるようになった。一方、農業もしつかり残されている。農業専用地区で生産された野菜は、毎週日曜日に開かれている朝市で販売され、平成元年からのスタート以来、おいしいと評判。

約四百年の歴史をもつ正覚寺は、戦時中は学童疎開を受け入れた。その碑「生命の泉 ここにありき」には、当時の様子と感謝の気持ちが続べられている。菖蒲、あじさいの咲く頃の野点の風景も心がなごむ。

寿福寺と茅ヶ崎城址。深川清治さんが案内する茅ヶ崎城址は本

丸や二の丸の跡もあり、中世の武家社会の様子が浮かんでくる。やがて整備され公園になるが、こんもりした山、周辺の古道を思わせるたたずまいには、なつかしいものがある。

再び茅ヶ崎まつり囃子。観音堂の鐘つき僧の昔話を聞きながら、獅子舞の中のおかめの化粧などユニークなしぐさに思わず笑いがこぼれてしまう。

新しい街に昔の伝統芸能が生きていることを実感する。



観音堂で奉納された茅ヶ崎祭り囃子

ふるさと
伝承ビデオ

4

水ぬるむ春の祭り

— 八幡様と水神様の例祭

撮影期間

平成四年十二月～平成五年三月

撮影場所

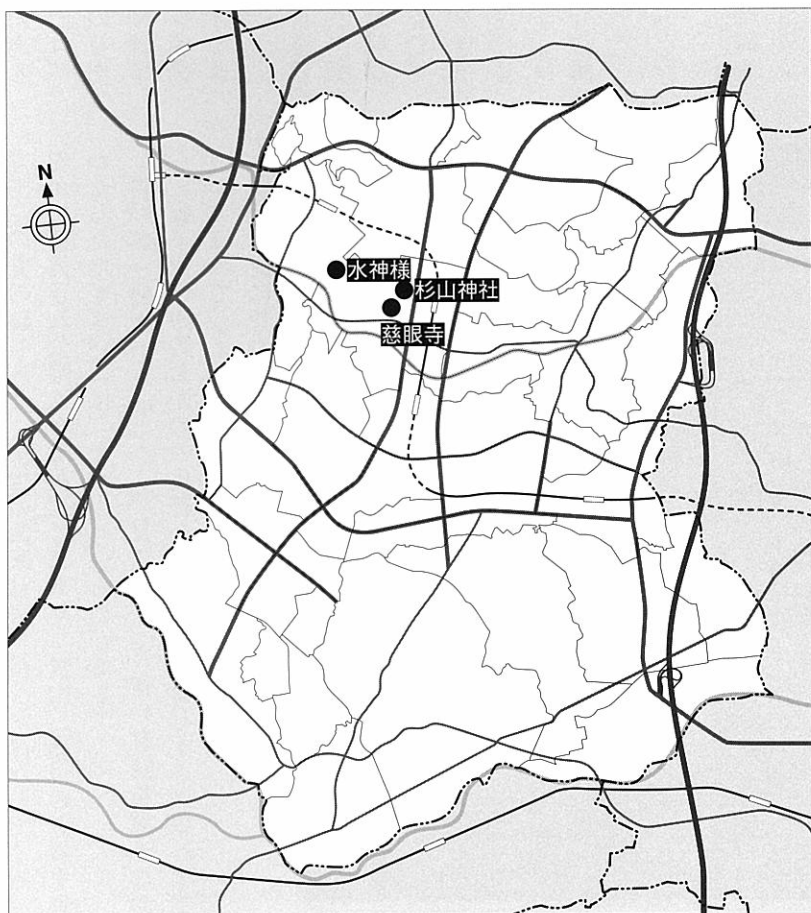
港北区(現・都筑区)中川町、町内会館、
水神様

見どころ

中川町では八幡様の春の例祭を水神様の祭りとともに、毎年行っていた。

春のはじめ、本格的な水田耕作が始まる前の三月二十六日、この祭りをしないと村が荒れると言い伝えられ続けられてきた。神事が行われた後の神主による舞がユニークである。面と衣装を取り替え、さまざまな装束で舞われる。

また水神様への雨ごいの祈りとして薬の蛇を作って早瀬川に流す話は、貴重である。



ストーリー

中川町の南西部を流れる早渕川。八幡様と水神様のお祭りは、中川町に伝わる行事で、神樂が奉納され、投げ餅が行われる。八幡様は明治四十四年に杉山神社に合祀^{ごうし}され社^{やしろ}はないが、この祭りをしないと村が荒れると伝えられてきた。

平成五年の三月、市営地下鉄3号線が開通した。あざみ野駅から新横浜までの区間で、待ちに待った地下鉄の開通である。電車から開発中のニュータウンが一望できる。センター北駅近くの吾妻山には、中川町・大圃町の杉山神社が仮移転されていた。中川町内会長の大久保正治さんが、そのいきさつの説明をされる。この神社には、四社か五社が合祀^{ごうし}されていること。仮社殿を造って毎年お祭りをしてのこと。郷社^{ごうしゃ}という社格^{しゃかく}をいただいていること。新しい社殿をセンター北駅の西側に建設予定のことなど。

新しく建設される社殿の近くに慈眼寺があるが、早渕川にちなんだ話が残っている。

早渕川は周辺の田を潤していたが、矢崎の上流に土の堰^{せき}を造っていた。大雨が降ると堰は決壊し、毎年のように村人が造り直していた。その苦労を見かねた慈眼寺の住職が木材の堰を造るようにと、寺の山林の一部を譲ってくれた。堰は大正十二年の関東大震災で壊れたが、翌十三年にコンクリート製に改修された。この堰は大圃堰といわれ、大堰、小堰の二つあった。昭和四十七年の護岸工事によって堰は無くなり現在のようになつた。堰の近くに水神様の祠^{ほくら}が建っている。雨^{あめ}がいも水神様への願いの一つで、日照りが続くと、六尺ほどの藁蛇^{わらへび}を作り、水神様に供え、水をかけて早渕川に流したという。

三月二十六日の水神様の祭りの日。神主さんを先頭に水神様に向かう人々。お供えをし、祝詞^{のりと}をあげる。その後町内会館に戻り、八幡様のお祭りに入る。同じようにお供えをして祝詞をあ

げ、いよいよお囃子と神樂の奉納である。さまざまな神様、おかめ、ひよっとこ、えびす様と、何度も衣装を替えての踊りは珍しく、子供たちに人気がある。

舞が終わると、盛大な投げ餅。狭い会館は歓声に包まれる。お囃子の太鼓をたたいたのは、大久保竹次さん。やがて、六月ともなると、早渕川沿いの田圃で田植えをしている大久保竹次さんがいた。昔から受け継がれてきた農業と祭り。豊年満作、家内安全を祈るさまざまな神事や行事に、暮らしの原点が見えるようだ。



神主による舞の一つ

ふるさと
伝承ビデオ

5

虫送り

—

夏の早湊川を彩る祭り

撮影期間

平成五年六月～平成六年三月

撮影場所

港北区(現・都筑区)南山田町、山田神社

見どころ

かつて全国的に盛んに行われていた虫送り。稲の害虫を送り出すこの行事は、伝統行事として数カ所に残っている。

ここ南山田町では、戦後復活し、現在は、町内会、子供会、消防団など地域の組織によって毎年行われ、子供たちを対象にした後継者育成にも力を入れている。いきいきとした子供の様子が印象的である。



ストーリー

赤々と燃えたいまつをかざして行列する大人と子供。夏の早瀬川を彩る伝統行事「虫送り」。

早瀬川はニュータウンの中央を流れているが、一時は都市開発によって汚染が進み、悪臭さえはなっていた。近年は下水道の整備も進み、水が澄み鳥や魚も見られるようになった。

早瀬川について、金子保さんの思い出が語られる。川の両側は水田で、数本のせせらぎが流れ込んでいたこと。戦前は清流でホタルや魚がいたし、子供たちは泳いでいたこと。

平成四年の九月、鮎が登ってきたという朗報が飛び込んできた。中川町の川沿いに住む大久保久夫さんが見つけたのだ。大久保さんは小魚が水面にはねるのを見て、どんな魚がいるのかと投げ網を打ったところ鮎が入っていた。このことは、「早瀬川に鮎がぼってきた」と当時かなり話題になった。大久保さんは、(財)港北ニュータウン生活対策協会の監事を務められた。

南山田町でただ一軒残った農家、栗原信雄さん宅では田植えが行われていた。栗原さんは稲につく害虫としてはニカメイチュウなどがいたと話す。

虫送りについて、郷土史研究家の川口謙二さんの話。虫送りは昔から続いていた伝統的な行事だが、ここの虫送りは古い形式で、村中でたいまつを持って練り歩き、村はずれまで来てパッと火を消し虫を送る。戦時中は灯をともしはならないと禁止され、中断していたが、戦後、昔のままに復活した。

町内会館では準備が進められていた。竹を切り、百本のたいまつを用意する。

いよいよ祭りの当日である。山田神社に集まり、獅子舞が奉納された後、獅子、お囃子を先頭に、子供たち、町内の人々の行列がスタートする。途中で一休みして暗くなるのを待ってから、たいまつに火がつけられ、子供たちに手渡される。赤々と燃えたい

まつをかざしながら早瀬川に向かって続く行列は遠くからもよく見え美しい。到着するるとたいまつは一方所にまとめられ、大きな火となって燃え盛る。その回りで、この日のために練習してきた子供たちが、お面をかぶり踊り狂う。夏の夜の幻想的な、そして大人も子供も心を一つにした伝統行事。時代が変わろうと、旧住民、新住民ともに楽しめるように工夫がされていると、栗原毅町内会長の話だった。

やがて秋の収穫をむかえ、栗原信男さん方では、稲刈りが始まっていた。



虫送りの一場面。たいまつがつつく

ふるさと
伝承ビデオ

6

「鯛釣り踊り」と大塚・歳勝土遺跡

はるかな昔の面影が漂う

撮影期間

平成六年十月～平成七年二月

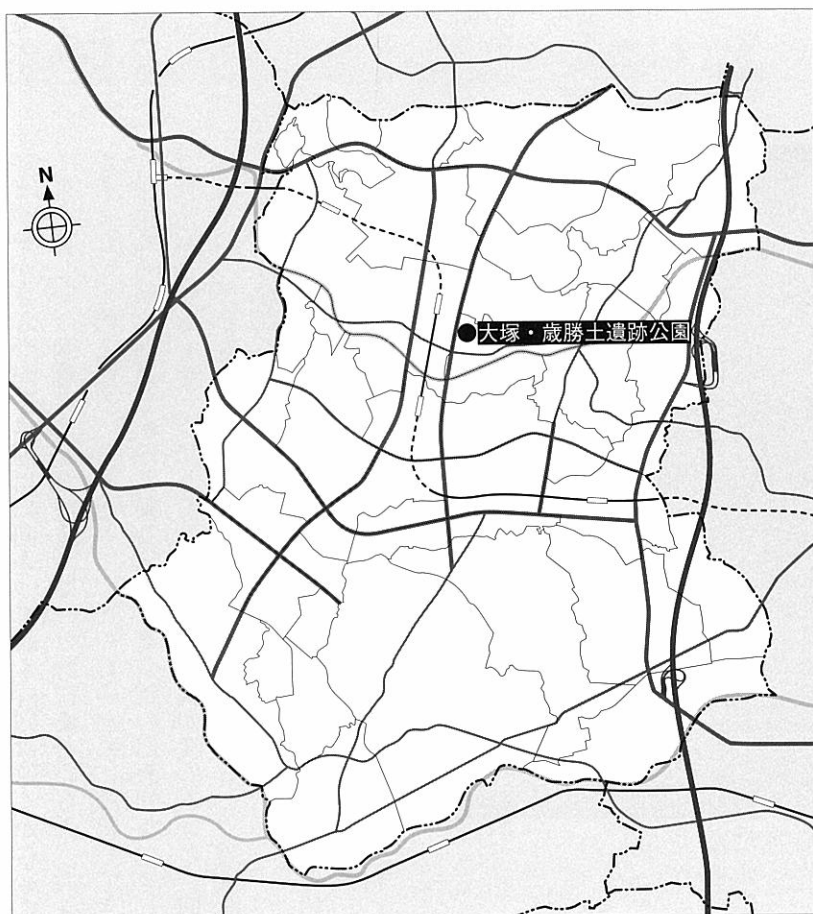
撮影場所

港北区(現・都筑区)大塚町

見どころ

平成六年十一月、横浜市に都筑区が誕生したが、この地域は発掘調査によって縄文・弥生時代から人々の暮らしが営まれていたことがわかった。その名残のような「鯛釣り踊り」という伝承芸能が受け継がれている。また地神講やどんど焼きも行われている。

ニュータウン地区最大の遺跡「大塚・歳勝土遺跡」が出土した大塚町のたたずまいに昔の面影を追う。



ストーリー

平成六年十一月、横浜市に都筑区が誕生した。港北ニュータウンの開発区域を中心に、港北区と緑区の一部を分離独立して誕生したのである。

早渕川に沿って細長く広がる大鵬町は、発掘調査のなかでも最大の遺跡、「大塚・歳勝土遺跡」が出土したところである。

その遺跡の真下にあたる歳勝土と杉の森地区に「鯛釣り踊り」の伝承芸能が伝わっている。海の近くでもないのに、なぜ鯛釣り踊りが、と思うが、この近くには南掘貝塚や茅ヶ崎貝塚などもあり、昔、海であつた名残とも思われる。

踊りは大鵬町内会館で披露された。青い海原を表すシートが敷かれ、先ず、獅子舞が大漁と無事を祈って激しく舞われる。獅子が消えると、にこにこ顔のえびす様が二人のお供を連れて現れる。浜に着くとえびす様はお供に餌を捕って参れと命じる。餌を探すうち、一人の供の目にゴミが入る。ゴミを取るのに火吹き竹で尻に空気を送り込むあたり、笑いを誘う。やがて、餌を付けて釣竿を垂れると、大きな鯛がかかる。そして意気揚々と退場するという素朴な内容である。

出演された方々は、後世に伝えていきたいが、後継者不足に悩んでいると、口々に話す。

一月十四日のどんと焼きのために、吉野敏雄さん宅では準備が行われていた。そして当日、早渕川に近い畑で、高々と竹や枯れ枝を組み立て、町の人々が持ち寄ったお札やだるまなどを中に入れ、夕闇の迫る頃、火がつけられる。ひとしきり激しく燃えた火が消えると、後に真っ赤に焼けた炭が残る。その残り火で三つ又の枝にさしたお餅を焼いて食べる。このお餅を食べると一年間風邪をひかないといういわれは、どこも共通である。独特なのは、お餅をさした櫂の枝は、玄関脇に立てておくところぼうよけになるとか、柿の木を叩くと柿がよくなるという言い伝えだ。

三月の春のお彼岸の前後の社日^{しゃにち}に、地神講が行われた。歳勝土と杉の森地区の人々が町内会館の一室に集まり、土神様の掛け軸をかけ、お供え物をあげ、おまいりをしてから、和やかに歓談するのである。この日一日は、畑の仕事をしたいけないと言いつたが、忙しい農作業の息抜きだろうか。

昔の面影が色濃く残っている大鵬町である。



どんと焼きの一場面

ふるさと
伝承ビデオ

7

梅匂う里の菊づくり

—— 佐江戸町・東方町・川和町の伝統行事と菊花愛好会

撮影期間

平成七年一月～十二月

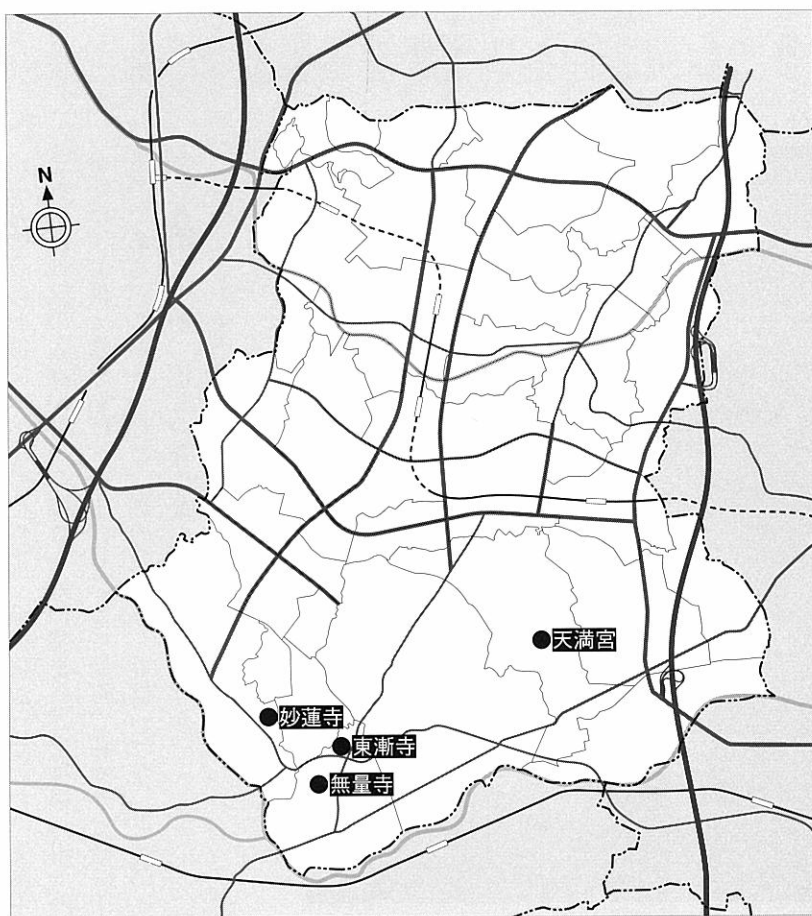
撮影場所

都筑区佐江戸町、東方町、川和町、天満宮、川和富士、東漸寺、無量寺、妙蓮寺

見どころ

もともと緑区ではじまった菊花展は、都筑区誕生にともない都筑区で開かれるようになった。毎年十一月、多くの市民の目を楽しませてくれる。会員は広範にわたっているが、佐江戸町が中心になっていることから、その周辺地域の伝統行事や伝説をからめて、菊づくりを紹介する。

天満宮の梅祭り、無量寺の花祭り、妙蓮寺のお会式の様子と、花にちなんだ話題は花を愛する人々の心が伝わってくる。



ストーリー

二月の末、^{ひがしかた}東方町の天満宮では梅祭りが行われた。たまたまこの日は雪まじりの雨が降り、町内会館での催しになったが、句会あり、野点ありの和やかな一日だった。

春はまた、菊花愛好会のスタートの時である。会長の菅沼喜代造さん宅では、さし芽や肥料の講習会が開かれていた。菅沼さんは(財)港北ニュータウン生活対策協会の副理事長として街づくりに尽力された。菅沼さんの菊づくりへの思いが語られる。菊づくりには、趣味を持つ楽しみ、人に喜んでもらう楽しみ、健康づくりの楽しみがあるという。

菊づくりの一年を撮影させていただき並木誠久さん宅では、既にさし芽が終わり、菊の苗はいきいきと育っていた。

春は一年でもっとも華やかな季節だ。かつてニュータウン地区には江戸時代盛んだった富士信仰により人工の富士山があちこちに造られていたが、今は数えるほどになった。川和富士はシンボルとして公園に整備され残されている。撮影したこの日はちょうど桜が咲き誇り、花見客で賑わっていた。

佐江戸町にある無量寺では、四月八日、花祭りが行われた。お釈迦様を花で飾り、甘茶をかけて祝う。地域の人々が次々に訪れ、和やかな歓談が繰り広げられる。

一方、東漸寺には、「いたずらむじな」の伝説が残っている。毎晩トントンと戸を叩くむじなに困った和尚さんが、ご本尊に化けたむじなを追出す話だ。

六月になると、天満宮では梅の収穫が行われた。収穫した梅は格安で町の人々に配られる。

九月末の日曜日は神社のお祭り。佐江戸町の杉山神社、東方町の天満宮では御輿が繰り出し、子供たちや若者が元氣よく担ぎ出す。祭りを盛り上げるお囃子は町のお年寄りが担当、ここには地

域の交流がある。

十月に入ると、菊花展の準備。そして十一月初旬、いよいよ菊花展が開かれる。センター南駅構内と区役所に並べられた見事な菊の花。懸崖で受賞した並木さんは「難しいからこそ、また挑戦しようという気持ちになる」と菊づくりの魅力を話す。菅沼さんは、この街を緑と花の街にしたいと抱負を語る。

十一月の末、川和町の妙蓮寺で御会式が行われた。花で飾られた万灯が会場を盛り上げる。

一年を通して、さまざまな祭りや花づくりが人々の暮らしを彩っている。



菊花展に出品された作品

ふるさと
伝承ビデオ

8

伝説と炭焼きの里

—— 荏田かいわい

撮影期間

平成八年四月～平成九年三月

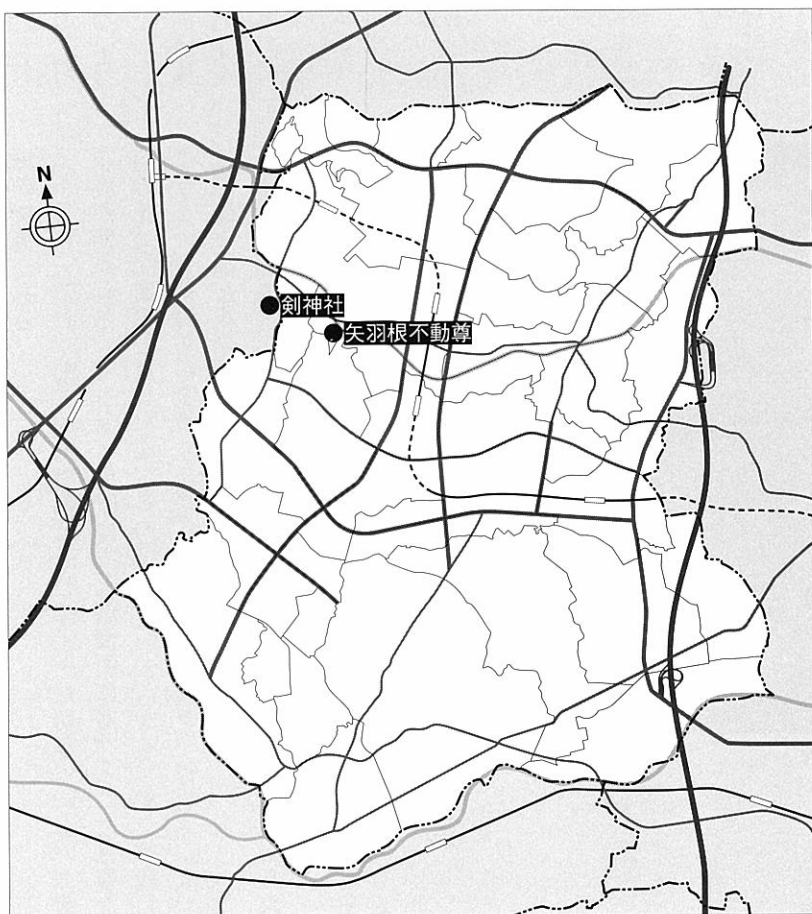
撮影場所

港北区(現・都筑区)荏田東、矢羽根不動尊、剣神社

見どころ

現在の都筑区荏田東、かつては緑区荏田町だったが、旧大山街道の荏田宿があり、江戸時代はたいへん賑わっていた。ニュータウン建設にともなう発掘調査によって、矢崎山横穴墓群が見つかり、太古から人々が住んでいたことがわかった。

矢羽根不動尊で行われている念仏講、炭屋の屋号を持つ旧家、剣神社の伝説を織りまぜ、昔の荏田かいわいの暮らしをたどりながら、現代の子供たちとの接点を荏田東第一小学校で行われているお楽しみ会の藁草履づくりや炭焼き体験を通して探ってみる。



ストーリー

都筑区の北西、早瀬川に沿った荏田東地区からは、発掘調査によって矢崎山横穴墓群が出土した。発掘当時の写真を見ると、矢崎山から南の方に向かって谷が続いているが、現在はビルと住宅地で、すっかり景色が変わっている。

矢崎山の下で暮らしている内野セイさんと、近くに住む井上千代子さんに、昔の話をしてもらった。洪沢谷戸には七十軒の農家があったこと。自給自足で味噌、醤油、油まで自家製だったことや干ばつの時の雨ごいの話などは貴重な話であった。内野さんの蔵には、今も古い農具がしまわれている。田起こしの道具、しよいこなどで、内野さんは使い方を実演してくれた。

矢崎の地名は、伝説によってつけられたという。荏田城（現在の江田駅近くにあった）の城主は矢の名手で、城から矢を放って矢の先が落ちたところを「矢崎」、羽根が落ちたところを「矢羽根」というようになったというのだ。

その矢羽根には矢羽根不動尊があり、毎年一月、五月、九月の二十八日に不動講を開いている。その日、地元の人たちが集まって掃除をして清め、お不動様にお供え物をし、輪になって太鼓をたたき念仏を唱える。矢羽根自治会長の大矢勇さんをはじめ集まった人々は、口々にこの集まりが心の支えになっていると話

す。

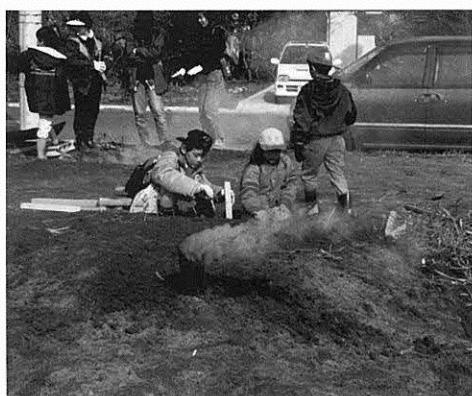
荏田東第一小学校では、土曜日の休みを利用したお楽しみ会の中で、藁草履づくりや炭焼きなどがあり、地元のお年寄りや昔話をまじえながらの楽しいひとときを過ごしている。子供たちは「藁の匂いがよかった」とか「昔の人は大変だったんだなあ」とか、率直な感想。PTA会長の井上利明さんは、子供たちに郷土の伝統を伝えようと同時に地域との交流を兼ねたこうした催しを今後も続けていきたいと話す。

炭を作っている人は今ではもういないが、屋号が炭屋という家がある。森実さんと、当時四基の窯があったという。森さんは炭には暖かな温もりがあると当時を振り返りながら話す。

都筑区と青葉区の境にある剣神社。神社名の由来に炭にまつわる伝説があった。

昔、炭を商いしている商人が、鎌倉の刀鍛冶に炭を届けていた。いい炭を持ってきてくれたお礼にと、鍛冶師は一刀の刀を商人に贈った。その刀を持つての帰り道、疲れをいやそうと泉谷戸で休み、水を飲むと眠くなってしまった。すると木の上から大きな蛇が降りてきて商人を一呑みにしようとならった。蛇が飛びかろうとしたその時、刀がひとりでに飛び出し蛇を退治した。商人は驚いて刀に感謝し、刀明神にしたという。

荏田東第一小学校のお楽しみ会では、炭焼きが行われていた。指導をされた大矢三郎さん、元荏田東小学校PTA会長の永田英司さんは、昔の暮らしを子供たちが体験できるこのような機会を、できる限り続けてもらえればと話している。



炭焼きに取り組む子供たち

ふるさと
伝承ビデオ

9

望郷

失われたものの記録

撮影期間

平成十一年二月～三月

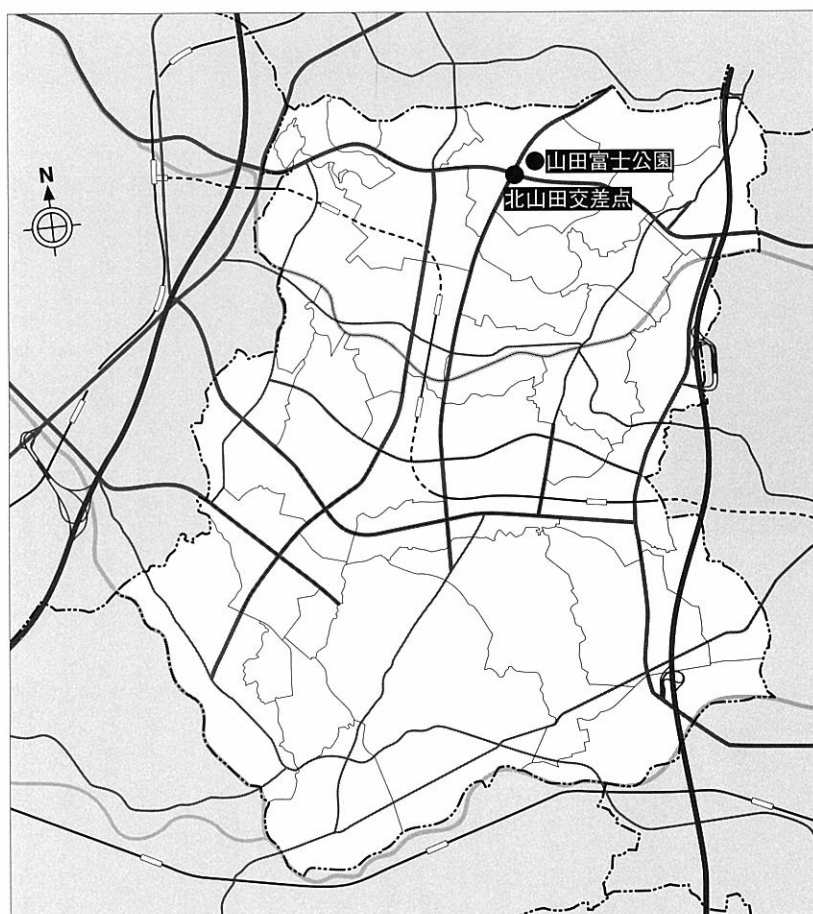
撮影場所

都筑区北山田一丁目

見どころ

現在、センター北駅前に建設中の共同ビル。その地権者の一人である男全富雄さんは、北山田地区の開発事業の指導者としてニュータウン建設を推進してきた。すっかり新しい街になり、古い暮らしや町並みが消えてしまった今、昔の暮らしを記録に残すには絵を描くしかない。約三百枚の絵を描いている。絵には、昔の村の様子、農業、主婦の暮らし、子供たちの生活、戦争、そして開発と、めまぐるしい激動の時代が忠実に描かれている。

一枚一枚の絵は、横浜市北部の歴史の証言であり、貴重な資料といえる。



ストーリー

絵を描いている男全富雄さん。その動機を山田富士公園で新しい街を眺めながら語る。

開発当時、町内会長として地元の人々をまとめ、全員が賛成して開発に踏み切ったこと。先の太平洋戦争では命を落とした仲間たちがいたこと、それらを思うと、ふるさとの風景を消えて無くなるままにしておきたくない、何かの形で記録を残したい、それには、カメラなど無かったので記憶をたどって絵を描くしかなかった、と。

その絵に描かれた、かつての村の様子、農業、主婦の暮らし、子供たちの生活、戦争、開発と、時代の流れとともに変貌してきたこの土地と人々の姿を、順を追って次々に画面に映しながら、男全さんの語りやナレーションによって場面の説明が入る。

場所は北山田一丁目、日吉・元石川線の北山田交差点の一角、その辺りが男全さんの屋敷のある、この物語の舞台である。

はじめに村の様子が出てくる。川に沿った低地は水田で、山の斜面には畑が作られ、農家が点々と屋敷を構えていた。農家の家屋は二階建てで、二階には蚕が飼われていた。

戦前の山田富士。回りは水田と森に囲まれている。毎年四月八日には花祭りが行われ、甘酒を振る舞い賑やかだった。

次は農業の営みである。春一番の田起こしから代かき、田植え、草取り。日照りの時の雨ごい、楽しいお茶の時間、戦後始まった農薬の散布。そして収穫。脱穀の移り変わりひとつを見ても、自動化された現代に比べて、かつては非常に大変だったことがつくづくわかる。そして縄ないと俵づくり。米一俵が65キロあり、それをかつげないと一人前として認められなかった話には驚いてしまう。野菜づくりでは、さつまいもの保存、肥料かつぎ、何とも気持ちのよさそうな青空の下での昼寝の絵、竹の子掘りや茶摘み、桃の袋かけ、野菜の出荷、酪農、冬の麦踏みなど。

次は運搬の移り変わりである。中でも面白いのは、リヤカー引きを手伝う犬や木炭バスの話。場面は変わり、主婦の暮らしでは、家事、育児と、大変な農家の主婦の様子が描かれる。昭和24年頃の羽根車を回した樽の洗濯機にはびっくり。

暮らしの場面として冬の団らんや和傘づくり、屋根葺き、戸主消防組や山田館の話の後に子供たちの生活が出てくる。赤ん坊をおんぶして登校する子供、朝の掃除に風呂焚きなど、子供も家事の手伝いをさせられた。その一方、ドジョウ捕りや雀捕り、ホタル狩りなど、自然の中での遊び、手作り車やコマ回しの遊び、大人の自転車を横乗りして得意な様子と、いきいきとした暮らしが描かれている。

そして戦争。戦地に赴く夫、無言の帰国。物資が不足し、鉄の供出、竹材の利用、松ヤニで造った油まで使われたことには驚いてしまう。そして北山田にも空襲があったこと。終戦によって再び平和な暮らしが戻ってきたが、昭和40年ころから大規模な土地開発が始まった。日本住宅公団の職員と村の人々の交渉の様子が描かれる。山を削り、谷を埋め、全体を平らにして都市基盤が作られた様子、屋敷を壊し、お墓を掘り起こしお寺の墓地に移したことも貴重な記録だ。

ここには何代にもわたって続けられてきた北山田の暮らし、男全さんの記憶にある大正末から昭和末までの暮らしの移り変わりが描かれている。

最後に、再び男全さんに、これからの街づくりへの思いを語っていただいた。「発掘調査で縄文・弥生時代の遺跡が出たことでもわかるように、昔からここに住んできた人たちは、初めは誰もが新住民だった。新しい街ができた今、新しく移り住んだ人たちと一緒にあって、新しいふるさとを共につくっていききたい、それが自分たちの務めだと思ふ」と。

スライド

望郷

失われたものの記録

制作時期

平成十年十月

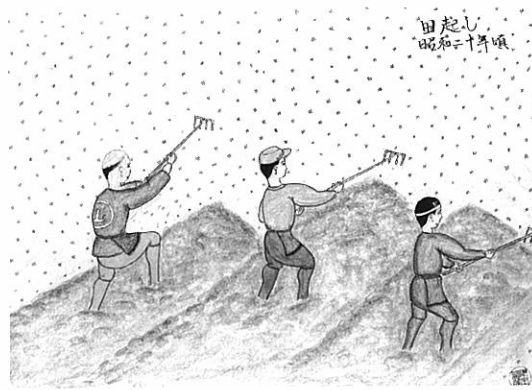
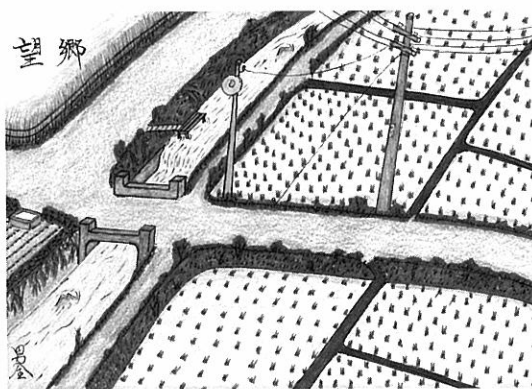
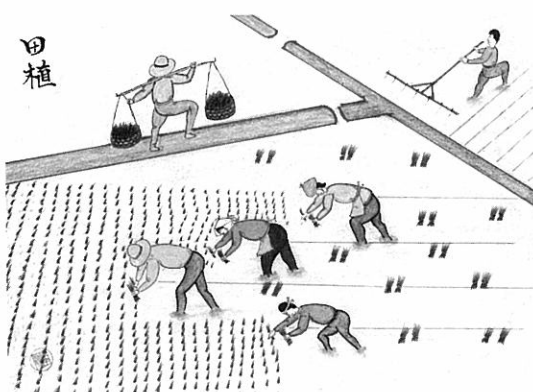
制作の目的

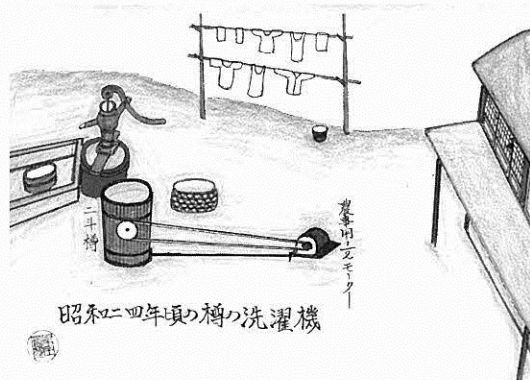
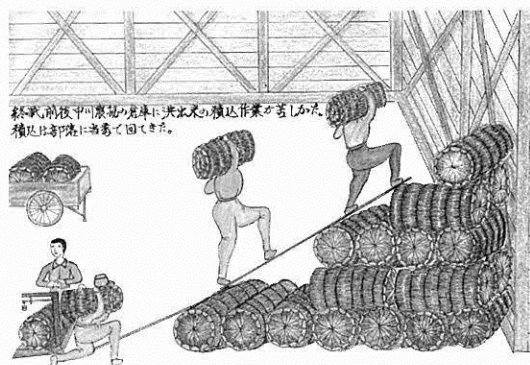
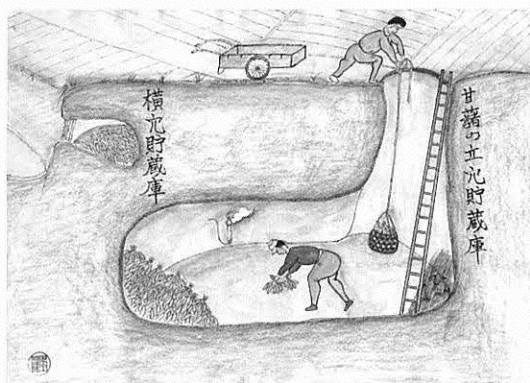
ふるさと伝承ビデオ「望郷」で紹介した絵をスライドでも利用できるようにと制作した。スライドには、随時映像を止めて、話しのキャッチボールができるという利点がある。

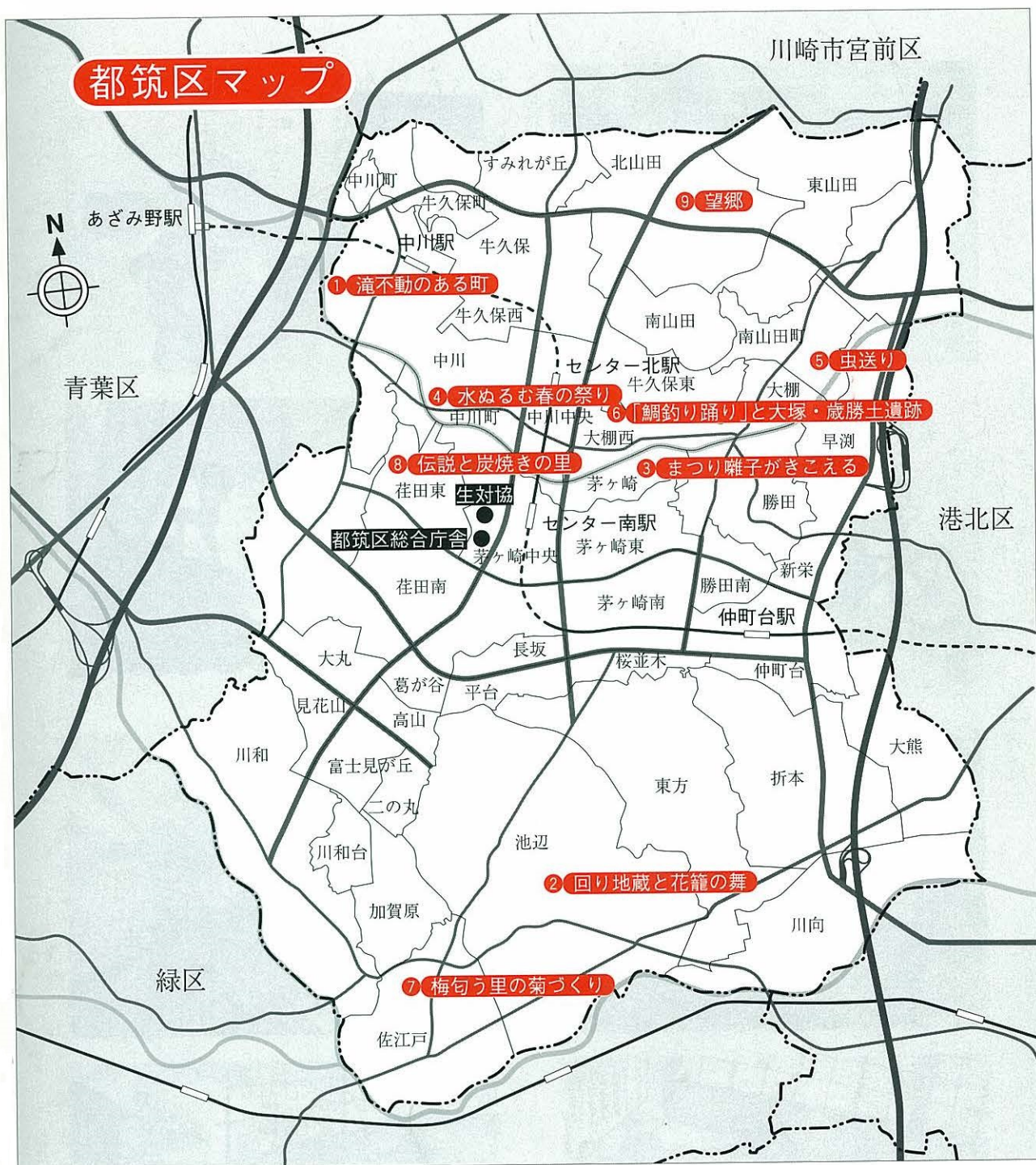
特に作者の男全^{おまた}さんが、毎年北山田小学校で行っている上映会では、子供たちがメモをとったり、質問したり、家庭で聞いた話を思い出したりと、活発な交流ができていくという。ビデオとは別のスライドならではの良さがあるといえる。

このように学校や地域の集会などでスライドを使って、さまざまな交流に役立てていただきたい。

ストーリーは、ほとんどビデオと同じなので、絵を抜き出して紹介する。







ビデオ貸し出しの申し込みは生対協へ
貸し出しは無料です。お気軽にお申し込みください。

財団法人港北ニュータウン生活対策協会

〒224-0006 横浜市都筑区荏田東四丁目10番3号 TEL. **045-942-8745**